

新たな「中心市街地活性化プラン」に向けて

中心市街地の区域

石岡市が2001年策定の中心市街地活性化プランで定義づけた“中心市街地”は、資料の通り面積は約93ヘクタールである。国衙が盛えた1300年前には、この範囲に2万人以上の人口があったと推定される。歴史遺産もこの地域に集中していることも含めて、この範囲を“まちなか”と定めるのは的を射ていると思われる。

このプランで既に、歴史的な価値があり、石岡市の魅力を表現し、人客をひきつける財産となり得る建物の写真を列挙しているし、景観という切り口に於いては、十分であると考ええる。(資料編参照)

ただし、仏閣、すなわち、お寺の多くは、本堂の前にも墓が広がっている。その為、他の町からのお客様の観光には適さないとわれ、理想と現実の差異がある。

次に、プランなかで、大いにその活用が期待されていた『まちかど情報センター』であるが、残念ながら、わずか、20坪程度のスペースを開設しただけではやはり“まちなか”の衰退は止められたとは言い難い。市民が集い、会話を楽しむスペースは、商店街でがんばっている「喫茶店」等にも担せるべきだと思う。実際、まちかど情報センターの向かいに1店、少し離れた駅前通りと中町通り、金丸通りに合わせて3店の昔から営業している喫茶店が存在する。

これらの喫茶店はいずれも、情報発信基地となり得る条件と能力を有しており、それぞれに特色を出しながら、街への集客とにぎわいづくりに貢献している“やる気”の喫茶店である。これらの喫茶店に「まちかど情報センター」を補完する役割をぜひ担ってもらうべきである。

行政と地元事業主が十分に協議し、双方の合意に基づくきめ細かな配慮を持った計画の立案と、机上の理想論を現実に合わせて修正して行く柔軟性が必要である。

いずれにしても、鍵を握るのは現場で活性化を担う人材である事は論を待たない。

提 言

今回の提言は、2001年策定プランプランを肯定した上で、それでは足りない部分を補なおうとするものである。「石岡市には、こんなに、歴史を活かせる建物が残っているんですよ」と言っても、外部の人が評価して訪れてくれなければ、にぎわうまちづくりは不可能である。

ましてや、石岡と鉾田をつないで、石岡の商圈の確立に役立っていた鹿島鉄道の廃線という不測で最悪の事態に陥っている今、“おだやかな”市民まかせの再興策を待っていては、間に合わないのが現実である。

全国のまちづくりの成功例を見ても、市民と首長の熱意に支えられた思い切った事業を柱とし

て、街の商人が立ち上がったケースが多い。

とは言っても「未来の活性化に向けた計画を立てる」ということは大変なことである。しかし石岡市の中心地の活性化なしに、周辺を含む地域住民の未来に希望は語れない。したがって、早急に取り組みかつ成功させねばならない重要課題である。

「同じものなら一円でも安い方で買う」消費者のある意味での本音であろうが、そのような考えが、つまるところ街の商店の衰退を招き、まちなかを空洞化させたことにより、車の無い人、特に高齢者は、まちなかで用が足せない現状をもたらす結果となった。治安も悪化している。そして何より石岡市民の愛する“おまつり”でさえも各町内の人口減少や経済基盤の脆弱化により正常に運営できなくなる危険性もある。

今後、急速な高齢化社会が現実化する。『ご近所さん』の存在がより重要になるのである。

このようなことを勘案して、今回このような提言の3つの柱を立てた。

- 1、歩いて暮らせるコンパクトなまちづくり
- 2、中核施設を起爆剤とした“年中おまつり”のまちづくり
- 3、なつかしい田舎を持つまちづくり

そして、考え方の基本として「石岡のまちなか」を訪れる人の数（来街者）を増やす事に重点を置いた提言とした。



1、歩いて暮らせるコンパクトなまちづくり

まず今回、検討される新しい中心市街地活性化基本計画では「コンパクトで賑わい溢れるまちづくり」を打ち出さなければならない。

1. 駅を活用する

理想型、最終到達目標として、前回のプランの中心市街地の範囲である93ヘクタールの線引きに異論はないが、今、目の前にある現実を直視すると、まず、第一段階として、「石岡駅から、総社宮さまに隣接する国衙跡までの地域の再開発」に重点を置くことを提案する。（重点再開発ゾーンを駅前前のAゾーン、中町のBゾーン、国衙跡周辺のCゾーンの3つに区分した）

昭和40年代まで、石岡市役所（昭和49年にCゾーンから移転）、石岡警察署、石岡消防署（ともに駅前通りから移転）はこの地域内にあったが、3施設とも6号国道沿いに移転し、市街地空洞化の引き金をひいた。

現在、TMOや、その発展型としての『(株) まち未来いしおか』の活動拠点となっているのは、Bゾーンの中町商店街であるが、前回のプランを実践した結果は、思わしくない。アーケードを撤収した分、街並みがひっそりとして、淋しさが前より極だった感もある。そもそも『お客様はどこから来るのか』あるいは『どこからお客様を呼びたいのか』を明確にしないで、見かけだけ少し直しても解決にはならないと思われる。何軒かの店が、その歴史的たたずまいを誇っても、商店街としての足並みも品揃えも不完全で、お客様のニーズに適応する力は郊外のショッピングセンターと肩を並べるのは程遠い現状である。

ショッピングの楽しさを演出するレベルという基準は言うに及ばず、まちなかに住むお年寄りが、タクシーに乗って下着を買いに郊外へ出掛ける現実、平成14年2月に、中町にあった地元の百貨店『高喜』の閉店後から続いているのである。

昭和の終わりの約15年間、石岡市の商業は、駅前の西友（Aゾーン）と、中町の高喜（Bゾーン）を回遊する形でにぎわっていた。毎月第3日曜日には、西友と高喜を結ぶ金丸通り、寿通りが、歩行者天国となるなど、地元の商人の力が充分に発揮された時代であった。もう二昔前のこととなったが、実績として中町通りを含むこの通りは、なんとか、往時を復活させる可能性を感じさせる“街並み”だけは残っている。

又、Bゾーンには、『金刀比羅神社』が鎮座している。昭和40年代頃まで、毎月10日の縁日には、地元はもとより、県内の漁業従事者など、多くの参拝者が集まって、石岡駅から神社までの通りは人で埋まった。この神社が平成12年の失火により焼失した折りに「これで石岡のまちなかは、本当にダメになる」と感じた市民が多かったのも真実であろう。その本殿と拝殿が本年10月に新造される。中町商店街との連携で、この歴史ある「こんびらさま」に、にぎわいが戻り、そのご加護も受けて石岡の街に繁栄の光が再び差す事が期待される。

西友の跡地を含むAゾーンと高喜跡地を含む中町商店街周辺のBゾーンを優先順位の第一番に
すえて駅を活用した「歩いて暮らせるコンパクトなまちづくり」を目指すべきであるとする。

2. まちなか居住の推進でご近所さんパワーの復活

すぐそこに来ている高齢化社会が急速に進行する状況のなかで、案外とその準備ができていないのではないかと。石岡市の中心市街地には、スーパーが1軒、コンビニが1軒あるのみである。コンビニは市街地の端に位置し、スーパーの立地は、高齢者の運転では、行きやすい場所とは言えない。

今、かろうじて店を開けている、ないしは店舗として使用できる建物の権利関係にも問題があるような話も聞かれる。仮に、土地が借地であるのであれば、建て替えや転貸しの交渉が可能であるか否かも、今回の計画の推進に重要な問題となろう。そもそも、このような借地借家の問題もかつての、商店街の発展の阻害要因となっていたのも事実のようである。

それでも尚、衰退壊滅する訳にはいかない石岡市の中心市街地復活のためには、行政による調整を含めて、逃げて通れない話し合いの時が来ていると思われる。

道に面する部分は、当然、できうる限り店舗として整える事が前提であるが、奥（裏）の部分や店舗の二階を住居として使用することは、現在でも十分可能な道割りになっている。実際、商店の裏に庭を有している建物が多数有るはずであり、将来的には、低層な共同住宅や、戸建てであっても、緑地スペースを共有する設計など、ご近所パワーを発揮し易い、老いても安心して暮らせるまちづくりを目指すスタートラインとして、このまちなか活性化プランが策定・使用されることも考えられる。

道路や小駐車場、そして、表通りと裏通りをつなぐ土地の使い方などの方法論は従前の中心市街地活性化プランに詳しく説明されていたが、発表されて以来6年、実行する店舗が有ったか否か、またなかった場合その原因は何かを早急に調査しなければならない。（推察される理由は借地借家の問題と後継者がいない事実と考えられる。）



2、公共投資を起爆剤に“年中おまつり”のまちづくり

1. 駅前のAゾーンに、にぎわい拠点を作るべきである

前回のプランでは、一番後回しにされていた、「駅前地区の整備・再開発」に今回、市は4億6千万円の基金を計上したという（H19年1月1日付 府中タイムス）。しかし、平成19年3月末日を期して石岡⇄鉾田の鹿島鉄道は廃止となってしまう、すでに後の祭りの感が否めない。

今後、仮りにどこにもあるような『橋上駅』ができたとしても、それによって、にぎわいが取り戻せるとは言い切れない。今なら、一番線（下りホーム）へは、階段を使わないで行けるのに、わざわざ、ホームを橋上（2階）に上げる必要も、その為に大金を使う事もなかろうというのが大方の市民の考えのようにも見受けられる。その分の予算を、外からのお客が呼べて、地元住民も楽しめる、にぎわい拠点を作る事に振り向けるべきと考える。

どこにでもある橋上駅の建築よりも、レトロ感を強調した今の駅舎の簡易改造を行った方が費用対効果からみても適切な方策であると考えられる。

更に、鹿島鉄道の乗り入れも無くなるであろう時に、乗降客の増える見込みの少ない単なる駅舎に、巨額を投下し、それに比した効果が期待できるのかを充分検討すべきと考える。駅の東西を結ぶ利便性については、現在のペデストリアンデッキに屋根を掛けるだけでも、かなりのイメージが変わる。1階で外に出るか、2階で外に出るかの、その事だけの違いが、東西が結ばれているか否かなどと大騒ぎをするような違いになるとは思われない。

さて、本題のAゾーンであるが、駅を出ると目の前に昭和63年4月に閉店した旧西友の店舗が廃墟となり、さびれた石岡市の象徴のようにそびえ立っている。駅の前の通りに面して、自動車の展示場とガソリンスタンドがあるが「石岡市の役に立つのであれば、協力する」という地権者の発言もあったようである。

西友跡地も、その周辺を（所有者の意向もあろうが）行政の力で、この場所を市街地活性化のために遠方からでも人の呼べる“にぎわい拠点”として活用することができれば、石岡市の前途は明るく開かれるものと考えられる。

その核となるものとして、駅に直結する“文化・芸術ホール”がぜひとも欲しいところである。それは、NHKの「のど自慢」も開ける県下有数の文化ホールとなるように最少1,500名収容の規模を確保することが必要となってくる。（この建設が望まれるホールを「常陸國文化ホール」と仮称して以下の論を進めることとする。）

また現在、石岡市には、Cゾーンに石岡市民会館があるが築40年のこのホールは、収容人数が800人弱、座席の幅もせまく、当初のその役目を終えた感のする存在である。同会館は国衙跡に隣接している事もあり、建て替えずに、改築して、資料館や休憩スペースとしての利用も可能とも考えられる。



駅の目の前にNHKの「のど自慢」規模のイベントに使える文化ホールがある街は県内にも常磐線沿線にも見当たらない。その意味でもぜひ着眼すべきであり、他に先行されないためのチャンスと考えられる。地元の利用は、もちろんであるが、常磐線の上野から仙台まで、そして常磐道や幹線道路利用の県内外のお客様に、その交通の利便性をアピールした集客も可能である。

“とにかく訪れる人（来街者）の数を増やすこと”これが今の石岡市に求められる最大で唯一の命題なのである。

団塊の世代に象徴される“ゆとり”のある人々が増大する今後、庶民的な、あるいは高尚なアーティストたちによるイベントやコンサートが数多く開かれるようになれば、質のよいホールへの需要は増えるであろう。ましてや、広域からお客様を集めるためには、電車等のやはり公共の足が命である。駅の前文化・芸術拠点『常陸国文化ホール』は、石岡市の命運を懸けて行政と街

の商人が力を合わせて実現すべき未来を拓く拠点となる必要なハコモノであると敢えて提言したい。

Aゾーンは、この『常陸國文化ホール』を中心に、ホール内に、市役所の出先機関などの設置も考えられる。そして、ホールと連続して、コンサート・イベント前後に飲食や買い物を楽しめるアーケード、プロムナードなどは民間でも自然に計画・形成されてくるだろう。

また市有の遊休地である神栄跡地の使途が検討されているが、常磐線利用の客を見込むには駅からの距離がありすぎる点と、商店街の連続性に無理があり、にぎわい拠点としては適さないと判断される。総合病院の誘致などを視野に入れてはいかがだろうか。

Aゾーン『常陸國文化ホール』が人でにぎわうようになれば、現在のまちなか人口では成り立たなかった商店や飲食店も営業が可能になる。AゾーンからBゾーンに続く一帯には、神社や横道など昔なつかしい風情が残り、再開発によっては活性化が進み、大化けする通りであると期待される。(何故ならそこは駅から歩いて10分以内の真にコンパクトな街区であるため)

集客は基本的に、鉄道を使つての集客を目指す。常磐道のICも近く、車での来客を考えて、駅東の市営駐車場を立体化し、収容台数を増やす必要性もある。(左の地図の「有効土地利用ゾーン」)

とにかく、魅力のある街づくりを提言する。コンサートやイベントで交通至便の駅前の文化ホール等に人を集め、それを見込んだ店が軒を連ねるといふ店ができれば、これまで買い物に困っていた“まちなか”の住民も利用でき、人が生活できる市街地が復活するのである。

まちなか対比・競合する郊外の大規模ショッピングセンターには、映画館が併設される例が多いが、これに対抗し差別化、特化するためには、より遠く、より広く人を集める仕掛けとして、駅を利用したこの規模の文化ホールは有効であると考えられる。

もちろん、映画館、今はシネマコンプレックスと称される複数のスクリーンを持つエンターテインメント施設を併設できれば、他にはない競争力を持つ事が可能であり、駅の持つ力が最大限に発揮できると思われる。

そして“まちなか居住”で特に推進したいのは、二世帯、三世帯の同居である。昨今の子供のいじめ問題や非行の増加は、主に核家族の増加、女性の社会進出に依るところが多いのではないかと考える。子供を家族の複数の目で見守る事、近所の大人が自分の子供と同じように教え導く古き良き昭和の人間づき合いは、単に懐かしいだけのものではなく、日本人のあるべき姿であるという考え方が多くなっていると思われる。

子供の声が路地にあふれるあたたかい“まちなか”の復活こそが地方には特に求められている。

2. 併行してCゾーン、国衙跡の整備、できれば国衙後元を

国衙跡は、石岡市の個有する貴重な歴史遺産である。しかし、これだけでは他地域から、客を呼ぶことは難しいかもしれない。しかし、駅から徒歩10分圏内のこの場所まで、訪問者の回遊を

目ざし整備をする、簡単にあきらめるべきでない重要な事業であると考えてる。

このCゾーンには、石岡のお祭りで名高い『常陸國総社宮』が鎮座している。国衙跡の市有地と隣接するこの神社の敷地と連続した形での庭園や公園の整備（上池・下池）を計画して、お祭りの三日間だけではない日常の信仰の中心として、市民、そして訪れる人々の憩いの場所とすべきである。

3、なつかしい田舎を持つまちづくり～まちなかへの回遊を促進させる～

石岡市近郊には田園地帯が広がる。平成17年に合併した八郷地区は、米作はもとより、1月のいちごから年中を通して、くだもの狩りを楽しめる。風光明媚な“なつかしい”日本の原風景、田舎が現存しているのである。

又、高浜地区は、恋瀬川、霞ヶ浦の自然が満喫できる。

鹿島鉄道が存続していれば、その沿線の景色もとてもすばらしく、その始発駅としての石岡の存在も、アピールすることが可能であったのだが、今となっては、いかんともしがたく、百里基地の民間共用、『茨城空港』へのアクセスにその最後の希望をつなぎたい。

さて、首都圏の中でも、常磐線と常磐道の両方の拠点を持つ石岡市は、日帰りの観光コースとして、PRとツアーの内容の充実によっては安定した人気を得る可能性がある。

市営の施設でも、四季折々に美しい花々が咲き誇る『常陸風土記の丘』と『フラワーパーク』があり、今でも、各地から観光バスを仕立てて観光客が訪れているが、“まちなか”はコースに含まれていない。このお客様にも、“まちなか”へ立ち寄ってもらえるような取り組みを急ぐべきであることを強調したい。

観光施設等への来場数 単位:千人

市 町 村	施 設 名 等	来場者数
石 岡 市	常陸風土記の丘	145
	石岡のおまつり	400
	高浜の釣り	10
八 郷 町	茨城県フラワーパーク	231
	やさと温泉「ゆりの郷」	187
	スカイスポーツ	140

「やさと」(石岡市発行の観光案内用リーフより)



つくばねオートキャンプ場

マイカーで気軽にキャンピングもできます。宿泊可能なケビン棟も充実しています。



三方を山に囲まれ、大きな自然に恵まれたやさと。四季折々の豊かな表情の中で、やすらぎを肌で感じ、きれいな空気とみんなの笑い声に包まれ、楽しく過ごしてください。青空も星空も時間の流れにまかせて。



佐久の大杉

古来から鹿島神社のご神木として信仰され、幹周りは8~9メートルもある、県指定天然記念物です。

自然の郷 Nature

鳴滝

水の口から愛宕山方面に流れる山中にあります。清水が高さ数十メートルの岩肌を伝って落下する眺めは幻想的です。



大きな自然の中に、大きな笑い声が聞こえる。



ハングライダー・パラグライダー

板敷山や足尾山にハングライダーとパラグライダーの基地があります。ハンググライディング日本選手権大会の会場にもなっています。



国民宿舎つくばね

筑波山周辺観光の拠点として、また、会議・宴会・結婚式もOK。リーズナブルに遊びたい家族にぴったりの宿泊施設です。安くておいしい食事もお楽しみください。



やさと温泉 ゆりの郷

やさとの自然を一望できる露天風呂は、鳥のさえずりさえも聞こえる自然の中のやすらぎの場所。楽しんだ後は、ここでゆっくり体をやすめてください。



東筑波ユートピア
自然動植物公園

広大な敷地の中に、野猿公園、子ども動物園、4WD専用林間コース、ロッジなどが点在し、スポーツ派にも自然派にもお勧めのスポットです。



野仏

茨城百景のひとつ西光院をはじめ、大覚寺の庭園など、自然と融合した歴史あるまちやさと。やすらぎの里として古きよき文化をゆっくり探索してみてください。きっとあたたかい気持ちに出会えます。

歴史の郷 History



峰寺山西光院

県指定文化財
木造立木観世音菩薩像(吉生)
西光院境内にあり、仏身は5.97mで、平安末期の作。山麓の高麗院長谷寺にあったものをこの地に移したものです。



県指定文化財
峰寺山西光院(吉生)
関東の清水寺と呼ばれ、本堂は崖に臨んで柱を組みあげた舞台掛け造りになり、眺めは絶景。立木観音像も拝観できます。

落ちつきの中に、繊細さと歴史の重みを感じる。



県指定文化財
板敷山大覚寺庭園

板敷山にある大覚寺は、親鸞の高弟大覚の開山とされています。庭園は桂離宮を模し、どの角度から見ても裏がない「裏見無しの庭」といわれています。



国指定文化財
善光寺楼門(太田)
室町時代の建築といわれる仁王門は、県内に現存する木造建築では最古の部類。現在は、無住寺。



国指定文化財
佐久良東雄旧宅(浦須)
幕末の志士。和学を修め熱烈な愛国者として劇的な生涯を遂げた佐久良東雄の生家。



県指定文化財
丸山古墳(高友)
四世紀後半の築造とされる。全長60mの前方後方墳。高友丘陵にある丸山古墳群のなかの盟主的存在です。



ギター文化館

築間にあるギター文化館は、スペインの世界的ギタリスト、故マヌエル・カノのコレクションを主体に古今のギターの名器を展示。ギター作りの工程が見られる製作工房展示室や木造のホールなどもあります。



「いしおか」(石岡市発行の観光案内用リーフより)

常陸國總社宮大祭

(石岡のおまつり)



四十数台の神輿・山車・
梟獅子が街を練り歩く

9月の敬老の日を最終日とする3日間に開催される。関東三大祭りの一つとも言われており、格式高い神輿をはじめとして、絢爛豪華な山車や勇壮な梟獅子が40数台市内を巡行する。

おまつり期間中の3日間で、約45万人もの見物客が訪れる。



常陸風土記の丘

自然の中でまろごと歴史体験



復元された古代家屋をはじめとして、市内で出土した土器などの考古資料が見学できる歴史公園である。

また、園内は四季折々の花が咲き乱れ、特に4月の桜や6月のユリ、7月の古代ハスは来園者の注目を集めている。



TEL	0299-23-3888
URL	http://business2.plala.or.jp/fudoki/
営業時間	【3月～10月】9:00～17:00 【11月～2月】9:00～16:00
定休日	毎週月曜日(祝休日の場合は翌日)
入場料	大人(16歳以上) 310円・小人(6歳以上16歳未満) 150円
交通	【電車】JR常磐線石岡駅下車～石岡市巡回バス常陸風土記の丘下車すぐ 【車】常磐自動車道千代田石岡ICから約20分 【駐車場】普通車125台・大型車13台(無料)

石岡の登録文化財

誰もが感じる「懐かしさ」の
たたずまいがそこにあります

壺

喫茶店四季（きっさてんしき）

昭和5年頃に建てられた貸店舗。木造2階建ての看板建。コリント柱の柱頭飾りや屋根に立ち上げた煙突風の突起物など特異な造形を持つ。当初から貸店舗として建てられた数少ない貴重な建物である。



貳

府中營（ふちゅうぼまれ）

安政元年創業の造り酒屋。代表銘柄の「波舟」（わたりふね）は、江戸の酒米産地を原料とした全国唯一の酒として知られている。主屋・長屋門・文庫蔵、穀蔵の4棟が指定されている。



参

丁子屋（ちやうしや）

江戸時代末期に建てられた格納庫。木造2階建ての商家建築。昭和4年の大火で焼失を免れた商家建築では、現存する唯一の建物。大火以前の土蔵も残っている。現在は、観光施設「まち蔵」として活用されている。



四

福島屋砂糖店

（ふくしまやさとうてん）

昭和5年に建てられた砂糖問屋。木造2階建ての商家建築。土蔵造りの建が、土蔵造りではなくコンクリートでできているのは大変珍しい。黒塗りの外壁が外観に重厚さを与えている。



五

久松商店（ひさまつしょうてん）

昭和5年頃に建てられた化粧品・雑貨店（現在は喫茶店）。木造2階建ての看板建。ドイッ下見板張りの正面外壁は、戦前、銅板が張られていた。昭和4年の大火後、この地区の店舗の瓦葺に広く採用された看板建の代表例である。



六

十七屋建屋

（じゅうしちやんはきものてん）

昭和5年に建てられた建屋。木造2階建ての看板建。2階は持込風の柱頭飾りを中心にして板張の通定を左右に配する。昭和4年の大火後この地区で最初に瓦葺され、この地区における看板建の先駆けとなった。



七

きそば東京庵

（きそばとうきやうあん）

昭和7年頃に建てられた蕎麦屋。木造2階建ての和風食堂建築。戦後、庭敷部分を取り払い、土間にテーブルと椅子を置いて客用の空間とした。蕎麦屋風の落ち着いた意匠は、この地域では珍しい。



八

森戸文四郎商店

（もりとぶんしろうしょうてん）

昭和5年頃に建てられた調味料店（現在は花店）。木造2階建ての看板建。柱のレリーフ、板長の窓、褐色タイルなど全体にアルデコ調の外観は、正面を洋風の意匠で飾る看板建の好例である。



九

平松理容店（ひらまつりようてん）

昭和3年に建てられた理容店。木造2階建ての看板建。三和土（たたき）に大瓦（おがくず）を混ぜた床は大変珍しい。コリント柱のダカンケスの彫りや煙突風の突起物など、昭和4年の大火を免れた建物当初の姿がよく残されている。



【常陸獅子】

関東三大祭りの一つとも言われている「石岡のおまつり」で勇壮に舞う獅子頭。太い眉が特徴である。茨城県郷土工芸品指定。



【酒】

明治期には「関東の灘」と呼ばれ、筑波山からの豊かな水を利用した酒造りが大変盛んであった。その伝統は、現在でも4軒の酒蔵に引き継がれている。

石岡酒造株式会社 0299-26-3331
白菊酒造株式会社 0229-26-4131
藤田酒造店 0299-26-2582
府中 營 0299-23-0208



【石岡府中杉細工】

杉材を使った樽や仕込み桶作りの伝統を生かし、重厚さのある香り高い杉細工を制作している。茨城県郷土工芸品指定

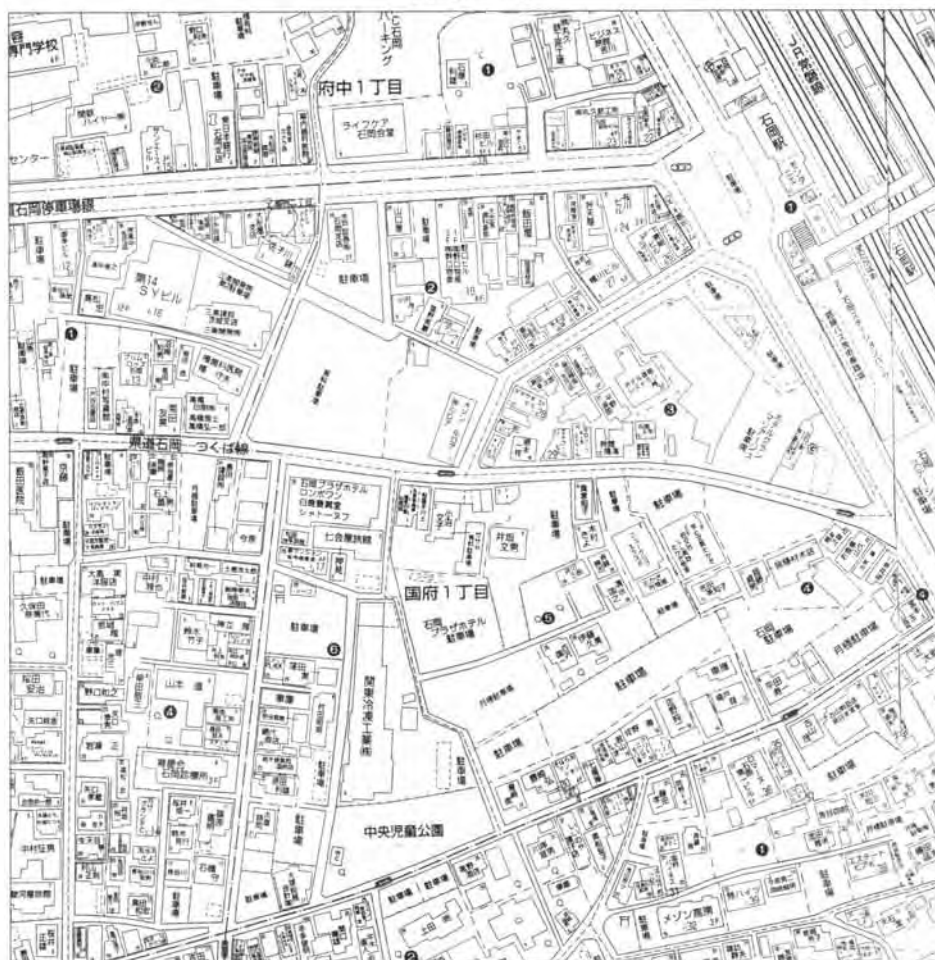


4. 実証と活性化の為の具体策

石岡市まちなかの現実 市街市活性化が急がれる理由と具体策

平成19年1月8日、正午～午後1時に撮影した石岡市内の写真を掲げて論を進めることとする。
1月8日は、成人の日で祝日であり、前日までの強風も止んで、買い物や散策には適した日よりであった。

Aゾーン



①石岡駅

現在はJ R常磐線と、鹿島鉄道鉾田線が通る。(鹿島鉄道は平成19年3月末日で廃線が決まっている) 改札口は一つ。特急列車の停車駅で、上野までの所要時間は1時間弱、県都の水戸までは約20分である。平成21年度に開港予定の『茨城空港』(自衛隊百里基地の民間供用)の玄関口

となるべき駅と思われるが、鹿島鉄道の廃線で、これへのアクセスをどうするべきか、早急な対策が待たれる。隣の羽鳥駅からのシャトルバスの運行は決まっているが、年間80万人とも期待される『茨城空港』の利用者には是非とも石岡駅周辺および、まちなかにも呼び込めるような施設の建設が急務であるとする。



J R石岡駅、出口はこの1箇所である



駅の前を通り6号国道へ続く通り、
右側の大きな建物が西友跡

②石岡駅となりのバスターミナル

将来の石岡駅の橋上化を前提にして建てられた施設である。この上に改札口を載せて駅の東西をつなぐことを想定した構造である。現在は、関東鉄道のバスの発着に使われているが、利用者は年々減少しておりターミナルのにぎわいは皆無と思える。『土浦』『水戸』『柿岡』『鉾田』便などがある。



バスターミナル。大きな横看板に「国道6号石岡バイパス、早期実現」の文字が見える。計画から30年かけてようやく着工まではこぎつけたが、開通の日は遠い。県内で最悪とも言われる交通渋滞の解消が目的であるが、「実現にはあと10年はかかるだろう」というのが多方の見方である。

このターミナルに従来駅前の商店の前にあったバス停を集中させたことにより、益々、人の足は商店街に向かなくなってしまったと考えられる。バスのターミナルというよりは通勤通学者の送り迎えのマイカーの駐停車場としての利



左側の車は、駅利用車のものと思われる。この坂を上がると6号国道に出る。

用が目立っている現状と思われる。

バス停を元の商店街の中に戻して、この場所は産地直売の野菜などの『朝市』や『屋台』の出店スペースとして、少しでも、にぎわいの出せるような街づくり視点での活用を考えたい。

同じ面積の屋上もあるが、現在は何にも利用されていない無駄なスペースとなっている。

③交番わきの公園

公園と呼ぶべきには、矮小なスペースが、駅の反対側（バスターミナルわき）にも存在する。現状では何のために有るのか不明である。市有地でもあり、客待ちのタクシーの長い列を道路から引っ込めるために利用するか、駅から近い駐輪場として活用するか、何らかの有効利用を図るべきである。



④駅前通り（みゆき通り）

活性化に向けて電柱の地中化とアーケードの撤去が実施されたが、現状は典型的なシャッター通りに見える。金融機関の店舗が多いのも特徴。十年前に葬儀場が出店しまちの目抜き通りは、“にぎわいのふさわしい” まちなかではなくなった印象も感じる。当時は「お葬式でも、人が来てくれれば、近くの商店で買い物をしてくれるだろう」と考えた人々も居たが、お葬式の帰りに買い物をする習慣はなかったようである。



駅から見た駅前通り



葬儀場



多くの店がシャッターを降ろしている

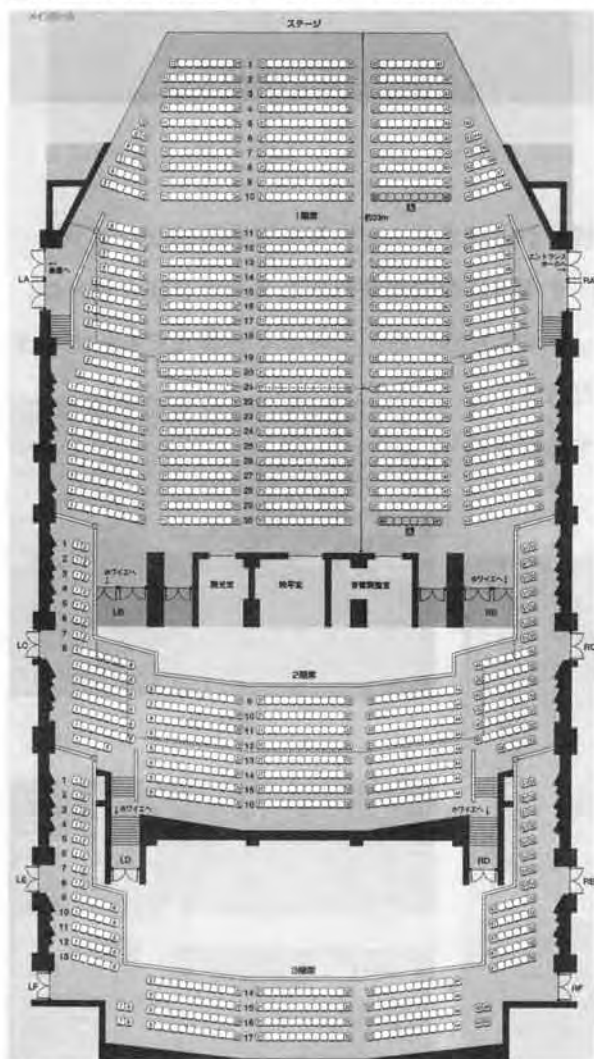
⑤旧西友跡

ここを中心とする一帯がAゾーンである。この場所に『常陸国文化ホール(仮称)』を建設し、まわりをショッピングモール化することが“にぎわい拠点”創出の核となる事業であると提言するゾーンである。(“駅の前のホール”は県外各地で駅周辺の再活発の中心として創られているので川口や横須賀の例も参考にしたい。)



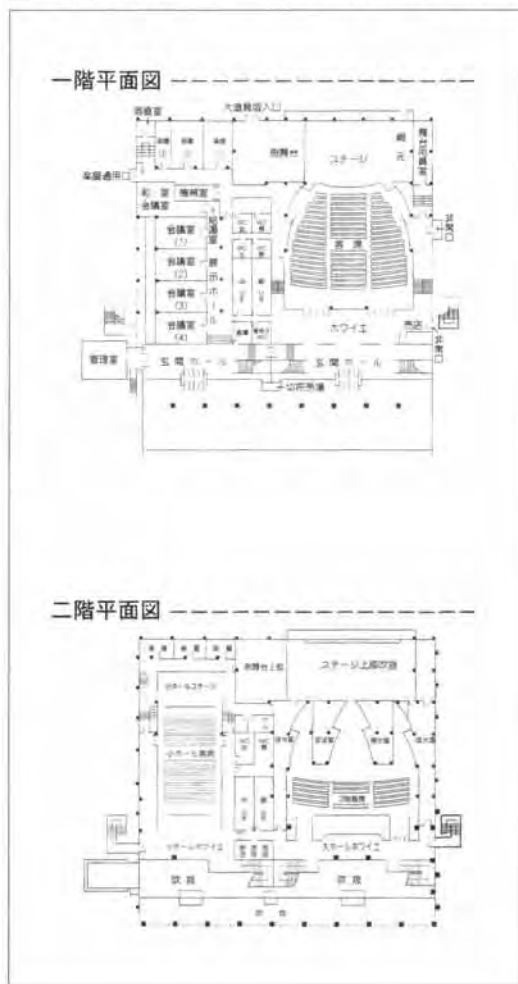
昭和63年4月に撤退した旧西友ストア跡

■川口総合文化センターリリア 約2000名収容



J R川口駅周辺整備事業の一環として建設された。中型の多目的ホールとして、多種多様なニーズに対応している。(オープン1990年)

■土浦市民会館 1182名収容、駅から車で約10分



⑥ Aゾーンの路地と横道（金丸町）

この界隈は、何本もの路地や横道が存在し『お稲荷さん』などパブリックスペースとして有効活用したい施設も点在する。アイデア次第で石岡市の歴史を活かした雰囲気が充分に出せる地区である。



駅から金丸通りを見る



開運稲荷に続く路地
駅前通りへ抜けられる



路地の奥のスペース



駅前通りに続く路地



空地、有料駐車場



空地、空屋が目立つ



路地の先は住居スペースが多い



住居スペース

B ゾーン



⑦ AゾーンからBゾーンへ続く商店街

昔は『金丸通り商店街』として毎月第3日曜日には歩行者天国が実施された「通り」の現状がこれである。商店街と言うよりは閉静な住宅街と化している。

買い物ゾーンとしての復活は、かなり難しいかもしれないが、Bゾーンへの誘導はこの道がベストと思われる。



かつて歩行者天国が実施された道



空地は駐車場となっている



鈴宮稲荷



路地、床屋さんの後ろに飲食店、洋装店などがある



奥まで長い敷地の形



店舗の後ろには住居スペース、庭などがある



駅前通りに続く路地

⑧『まちかど情報センター』

この場所には20年程前まで、石岡市で一、二を誇る、古き良き大正、昭和の様式の建物が存在し“まちなか”のシンボルとなっていた。今でも、多くの市民はその姿を胸に懐かしくとどめているに違いない。

建て替えられて数年、シャッターが開けられることのなかった建物を市が借り受けて『まちかど情報センター』としたが、期待した“にぎわい創出”の効果は期待されたほどまだ出ていない。その運営には市から運営費年間100万円の補助をもらって『NPO法人まちづくり市民会議』があたっている。地元生まれの市民の参加が少ないのが現状である。



1階が『まちかど情報センター』専用駐車場はない

⑨商 店

閉店した店が多い中で営業をしている店の前には『地元買物運動推進中』ののぼりが出ている。心なしか自動車の通行量もまばらな感がある。祝日でトラックが休みのせいだと思われる。見渡す限り人影はない。ただし『石岡のおまつり』が開催される9月の3日間は、約40万人といわれる人で、ここから駅までの通りは埋めつくされる。千年の昔から、この地が周辺地域の中心であった事は事実なのである。そして駐車場の問題など、多少の難はあっても、人々は“楽しみ”や“必要”が有れば今でもこの“まち”を訪れることは、この3日間で立証されているのである。

その重要な3日間、唯一の集客の機会である『石岡のおまつり』を支える大きなものは“まちなか”の商店街や町内会の連携による言わば“ご近所の力”である。このまま空洞化が止まらずに商店が無くなれば、地域のまとまりは壊れて『石岡のおまつり』の存続すらも危ぶまれることとなる。旧町内ごとにかろうじて維持運営されているこのコミュニティも代替わりをよほど上手にしないとその崩壊は目の前に迫ってきていると思われる。

住んでいるだけでも大切であるが、住んで商売をしている“まちなか”の事業主の存在が『おまつり』ひいては、地域の豊かさや、安全を守る「要」である。



中町通りをのぞむ



がんばっている商店には、のぼりが立っている



香丸通りをのぞむ



駅前通りは、T路地につき当たる。左角の建物が『まちかど情報センター』。右に曲がると、香丸通り。左に曲がると、中町通りである

⑩ Bゾーン中町通り商店街

『ファザード整備改善街づくり事業』により、レトロな感じに直した店も存在する。地元の『コーキ』が閉店した跡地約600坪や駐車場として使っていた空地が広く残っている。(現在、ここへは高齢者向けのマンションの計画があるといわれている。)

まもなく新築、再興される『こんびらさま』の縁日など、歴史を活かした“にぎわい”が戻す具体的活性化策の推進を期待する。



路地も石畳になっている



昭和4年の大火後に再建された商店建築や看板建築の建物が残っている。まちなかの登録文化財としてアビールされている。



江戸時代末期に建てられた染物屋。現在は観光施設「まち蔵 藍」木造2階建ての商店建築土蔵も残っている。



コーキの跡地、シャッターでなく塀となっている

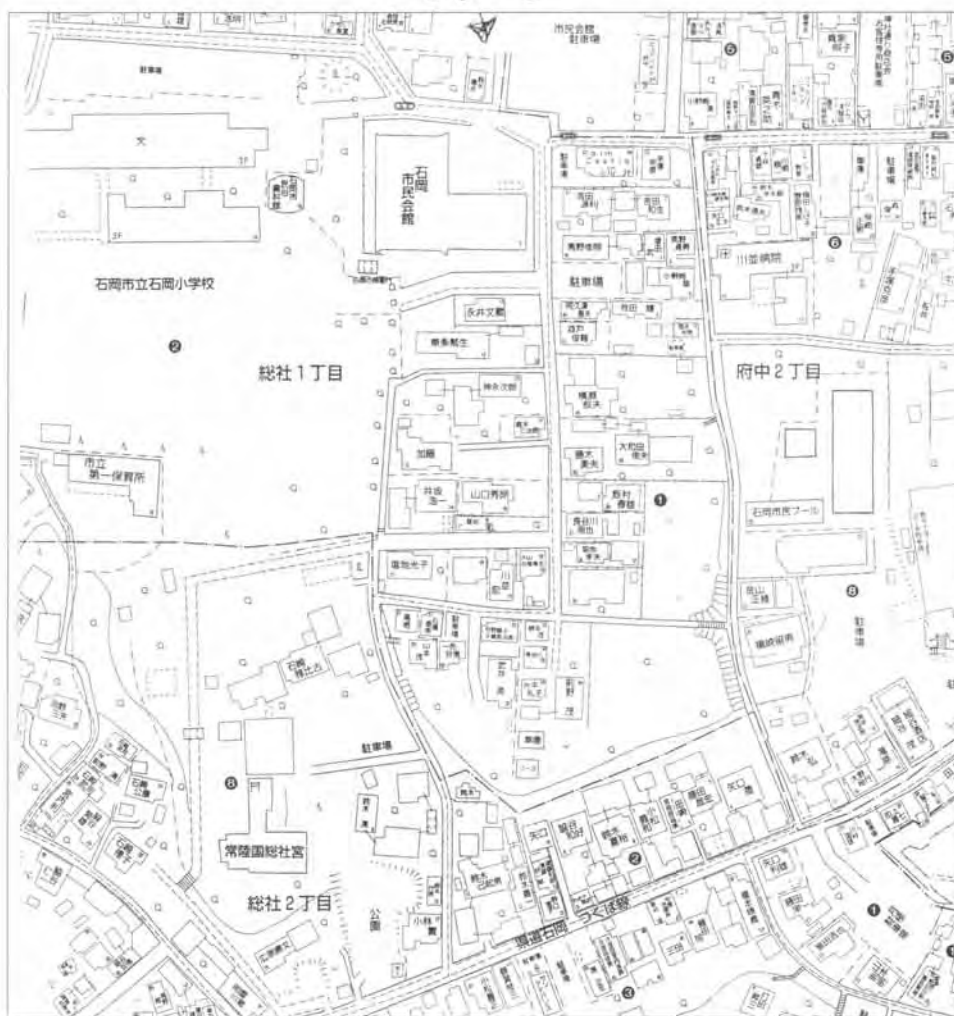


再建中のこんびらさま鳥居の右側が仮殿



こんびらさま前から香丸通りをのぞくまちなみ 歩行者も車も少ない

C ゾーン



⑪ B ゾーンからCゾーンへ

今のところ片側だけでも歩道が整備されている土橋通りをメインに考えるのが安全と思われる。計画に有っても未だ手つかずの『上池公園』から総社宮さまへの“歴史の道”は第一に整備すべきだと考える。



照光寺へ続く道、両側に住居が並ぶ



土橋通りから上池公園へと続く路地



神社のわきも通り抜けができる



中町通りから土橋通りの入口。石岡小学校のスクールゾーンでもある。歩道は石畳になっている



この道も中町通りからCゾーンへ続くこの奥にまちなかで唯一のスーパーマーケットがある



市民プールの跡地は、『上池公園』として整備が待たれる（P66参照）



「上池公園」から「総社宮さま」へ続く坂道。いつのまにか階段になっていた



階段を上がって土橋通りの方向をのぞむ。完全な住宅街である

⑫総社宮さまと国衙跡

『常陸国総社宮』は常陸国の国衙跡が発掘された石岡小学校に隣接している。「国衙を復元して観光資源とすべき」と市民の声もある。



『総社宮さま』へ続く道。奥に鳥居が見える両側は住宅



参道入口



参道入口の鳥居わきから石岡小学校の校庭となる。奥の大きな建物が昭和43年に完成した『石岡市民会館』である。手前に『陣屋門』が残されている



『総社宮さま』から下池へ続く階段。昔の参道はこの道だったといわれる。

〈取材をして〉

Aゾーンの駅から、Bゾーンをまわり、Cゾーンの総社宮さままで、写真を撮りながら歩いて約45分の行程であった。観光がてらの買い物客が歩いて楽しめる範囲の限度であると思われる。

市街地をマメに回遊し、来訪者や市民の足となる循環バスは全国各地で実施されているので、参考にすれば運行は可能であり、来街者のまちなか回遊にもつながるのではないか。それぞれの「通り」の歴史や特性を活かした、駅を基点とした駅周辺全体の活性化の可能性を強く感じた。



まち蔵

江戸時代末期に建てられた染物屋「丁子屋」(国の登録文化財)を活用した「歴史の里いしおか」の新しい観光スポットである。コーヒー・抹茶の喫茶スペースがあり、各種展示や特産品の販売、藍染め体験(有料要予約)も行っている。



石岡の碑屋門

県指定有形文化財(昭和43年9月26日指定)文政11年(1828年)火災に遭って焼失した江戸小石川の常陸府中藩邸が再建された際の余材を府中石岡の陣屋に搬入し建築される。昭和44年までは石岡小学校の校門として使われていた。高麗門形式。



舟塚山古墳

国指定史跡(大正10年3月3日指定)全長186メートルの前方後円墳。その大きさは県内最大で、東日本でも2番目の大きさを誇る。実際に古墳に登ることができる。5世紀頃の築造。



常陸国分寺跡

国指定特別史跡(昭和27年3月29日指定)天平13年(741年)聖武天皇の勅諭により、国土安泰・万民息災を祈願して全国66ヶ所の一つとして建立され、当時30名の僧がいたとされる。現在でも当時の礎石が残っており、毎年4月8日(お釈迦様)には「花まつり」が行われる。



常陸国分寺跡

社伝によれば聖武天皇の勅諭により天平年間(749-756)に建立されたとされる。室町時代の扁額三十六歌仙絵や太田道灌が奉納したとされる漆皮軍配など、貴重な文化財を多数所有している。



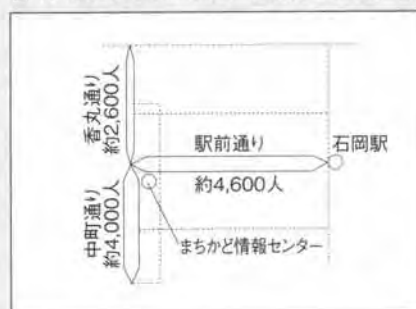
常陸国分寺跡

国指定特別史跡(昭和27年3月29日指定)常陸国分寺跡の北西約500mの位置にある。天正18年(1590年)佐竹氏が大掾氏を府中城に攻めた時に焼失し、現在は礎石を残すのみである。史跡公園としての整備が進められている。

中心市街地のにぎわいを計る尺度の一つとして、歩行者交通量が挙げられる。昭和30年代は、経済が活性化した時代で、中心市街地に多くの人通りがあった。バスを主要な交通手段として用い、徒歩が中心であった時代である。昭和40年代以降は、個人所得の伸びとともに自家用車が普及した。中心市街地は、歩行者、自転車、バス、自家用車利用者等によりにぎわった。近年は、郊外型居住の定着とともに、自家用車の個人保有がより一層進み、歩ける距離でも車を利用する人びとが増えた。長引く景気低迷の影響もあり、中心市街地の歩行者は、昭和50年代の2分の1以下まで減少している。

今後、計画に基づき、空き店舗を活用した公共機能の導入、道路のバリアフリー化、公衆トイレの整備、リンリタウンプロジェクトの推進、街なか再生による居住空間の確保等を推進することによって、中心市街地の歩行者交通量が増加し、昭和50年代の歩行者交通量に回復することが見込まれる。

歩行者交通量の予測（平成22年ごろ）



(2001年策定 中心市街地活性化計画)

	S54年	H5年	6	7	8	9
A 歩行者						
中 町 通 り	3,353	896	1,257	1,305	909	1,199
駅 前 通 り	5,005	1,063	1,829	1,414	1,360	1,227
香 丸 通 り	1,097	738	512	585	403	403
計	9,455	2,697	3,598	3,304	2,672	2,829
B 二輪者						
中 町 通 り	2,614	1,349	1,454	1,872	1,051	1,441
駅 前 通 り	1,435	580	637	693	686	721
香 丸 通 り	1,890	610	889	1,056	814	876
計	5,939	2,539	2,980	3,621	2,551	3,038
C 自動車						
中 町 通 り	9,638	11,102	12,041	12,688	11,541	10,852
駅 前 通 り	9,034	5,211	6,354	6,122	6,116	5,994
香 丸 通 り	12,795	12,824	13,568	12,245	12,543	12,910
計	31,467	29,137	31,963	31,055	30,200	29,756

まちなか居住～追い風の兆候も～

現在、駅前通りから北へ入った元スーパーの跡敷地約1,000坪の土地及び、Bゾーンの核施設と考えていた高喜跡地約600坪の土地に介護施設や高齢者用マンションの建設が計画されている。（前者は着工済。）駅から徒歩10分圏内の市街地の格安感が出てきたことにより、都市圏からの移住者を見込めると踏んだ民間事業者の動きであり、今後このような動きは加速すると思われる。移住者をも含めた、より良いコミュニティの創出も新たな課題として浮上して来ることになるが、まちなか再生に向けても避けては通れない事象である。

10	11	12	13	14	15	16	17
A 歩行者							
808	712	842	639	688	605	685	599
820	1,501	1,048	825	930	920	777	666
447	340	387	391	360	374	294	225
2,075	2,553	2,277	1,855	1,978	1,899	1,756	1,490
B 二輪者							
1,245	973	921	542	731	655	752	605
434	658	468	347	508	444	339	448
841	696	767	511	821	496	539	548
2,520	2,327	2,156	1,400	2,060	1,595	1,030	1,601
C 自動車							
11,173	10,716	10,716	10,219	9,168	10,500	10,523	8,915
5,719	6,025	5,518	6,002	5,712	5,536	5,179	4,695
13,173	12,533	12,121	12,032	12,308	11,553	11,423	10,509
30,065	29,274	28,355	28,253	27,188	27,589	27,125	24,119

→13年2月の前プラン作成で
22年の予測を立てたが逆行する結果が出た

石岡市観光 map

石岡市観光
map

至土浦

交通安全獅子頭

常陸國總社宮

石岡小学校

市農金館

東照寺

石岡青果地方卸売市場

石岡市立図書館

石岡の陣屋門
府中城の土皇
氏帝資料館

黒光寺

本浄寺

まちかど情報センター

山形カルチャー倶楽部

中町駐車場

レンタサイクル

まちかど情報センター

中町の登録文化財

石岡ハイヤー

平福寺

常光院

慈徳寺

石岡プラザホテル

中央児童公園

石岡駅前

石岡市消防署

石岡市役所

石岡第一高等学校

至水戸

レンタサイクル 300円



【ハイキング3時間 おすすめコース】

- ①石岡駅
↓ 徒歩約20分
- ②平福寺・北向観音
↓ 徒歩約5分
- ③金刀比羅神社
↓ 徒歩約1分
- ④中町の登録文化財
(まち蔵藍他)
↓ 徒歩約15分
- ⑤常陸國總社宮
↓ 徒歩約10分
- ⑥石岡の陣屋門
府中城の土塁
↓ 徒歩約20分
- ⑦常陸国分寺跡
都々一坊扇歌堂
旧千手院山門
↓ 徒歩約25分
- ⑧常陸国分尼寺跡

国登録文化財店舗

- ①喫茶四季
- ②府中營
(主屋・長屋門
・文庫蔵・穀蔵他)
- ③丁子屋
(まち蔵『藍』)
- ④福島屋砂糖店
- ⑤久松商店
- ⑥十七屋履物店
- ⑦栗山呉服店
- ⑧すがや化粧品店
- ⑨きそば東京庵
- ⑩森戸文四郎商店
- ⑪平松理容店

記号のご案内

- ① トイレ
- ② 無料駐車場
- ③ 銀行・信用金庫

至水戸

※ レンタサイクルご利用ください ※
利用時間

案内所 … 9:00 ~ 15:30 (冬季~14:30)
まち蔵 … 10:30 ~ 17:00 (冬季~16:00)

◎ご利用時に、1000円/台 お預かり
します。(返却時に、700円/台
お返しいたします。)



歴史の いしお里 か

お問い合わせは

石岡市観光協会

石岡市石岡3165-2

TEL 0299-23-1111
(内線414)

石岡市観光案内所(駅前)

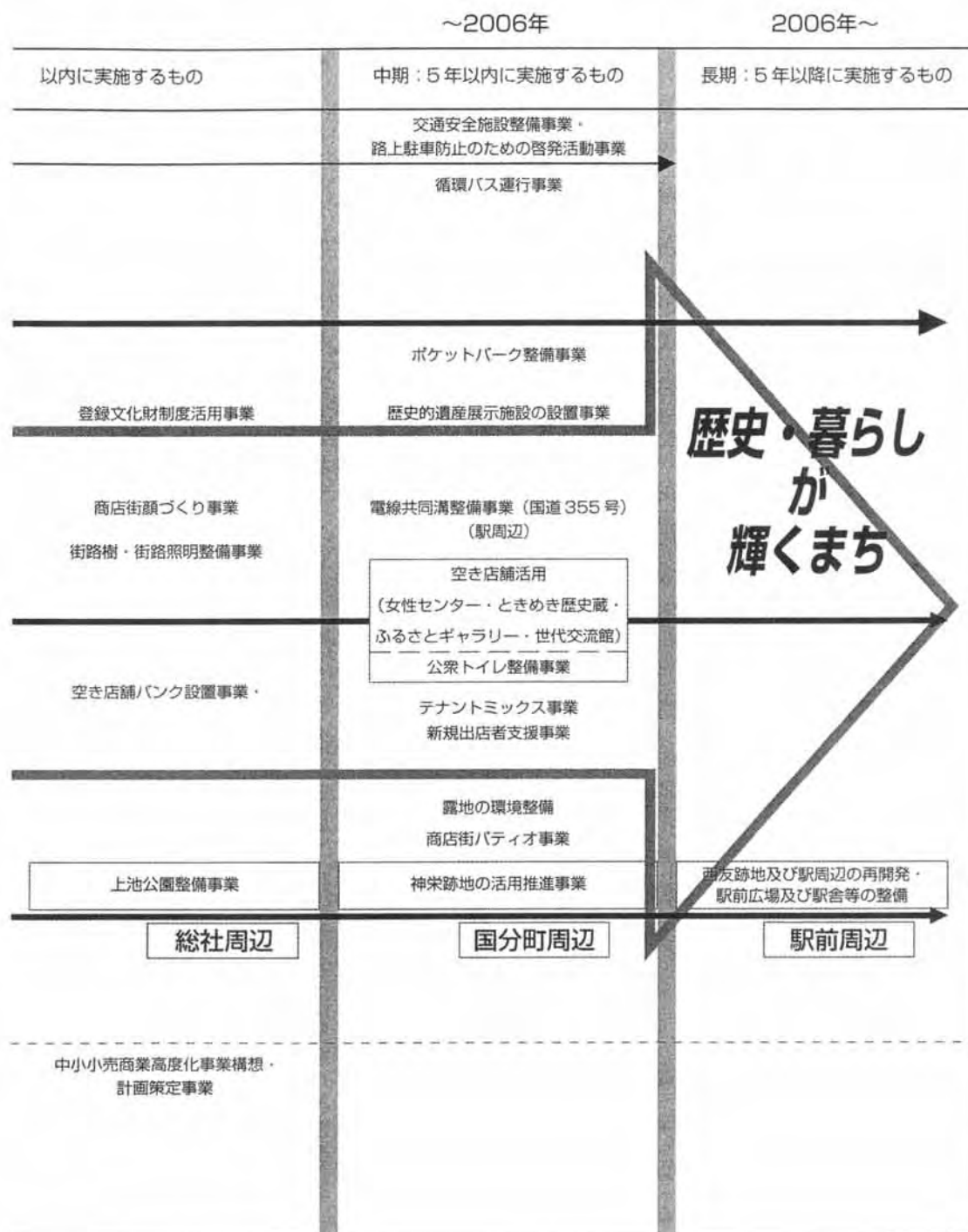
TEL 0299-24-5001
営業時間 9:00 ~ 16:00
(冬季 ~ 15:00)

まち蔵 藍(中町通り)

TEL 0299-23-8723
営業時間 10:30 ~ 17:30
(冬季 ~ 16:30)

2 中心市街地活性化の個別事業一覧

活性化方策	2001年	～2004年
	現在	短期：おおむね3年
アクセス改善	6号バイパス整備事業の促進	駐車場・案内誘導表示の整備
	市街地環状線整備事業の促進	リンリントウンプロジェクト
歴史のみちづくり	「ふるさと学習」の推進	歴史のみち整備事業
	街なか情報マップと まちづくり情報誌発行事業	花のみちづくり推進事業
	歴史遺産保存事業・文化財整備基金	文化財マスタープランの策定
商店街のみちづくり	電線共同溝整備事業	電線共同溝整備事業（石岡停車場線）
	まちかど情報センター	歩道の整備
	新商品開発支援事業・ 空き店舗活用商店街ソフト事業	高齢者等対応型ソフト事業
街なか再生		住宅供給促進事業
		中町地区のミニ再開発
		中町周辺
組織と運営	後継者育成事業	
	市民参加によるまちづくりの推進	



水戸内原ショッピングセンター』がオープンした。外周1.4キロメートル、駐車場台数4千台のスケールである。

専門店を貫くモールの長さは約200メートル、各専門店の間口も平均して3間ほどあり、この店揃えや、品揃えにどうすれば対抗できるかを考えると、易々と“まちなか”の再興が叶うとは思えなくなってくる。

石岡の場合、Aゾーンの再開発ですら、相当強烈なリーダーシップと不退転の決意がなくては、その計画の緒にすら着けないと思われる。Bゾーンのやる気のある商店主の多くが、前述の『ぱれっと』に出店しているというジレンマもある。真に地域間での競争を考えれば、駅を降りて駅前通りの北側一帯の再開も必要となってくる。

“郊外だ”“まちなかだ”あるいは“車だ”“歩きだ”と左右に振りまわされることも経済活動に於いては必然なのかもしれない。しかし、20年前の段階でも、現在の高齢化社会や、人口減少社会が予測はできていたとすればなおさらであろう。

人間として地域を大切に生きて心豊かに生きるのが一番であるのに、田畑を潰して巨大な商業施設を作ってもそこは虚構のまち、そこに住む人も居なければ近所づき合いもない。しかし一方では、営業時間内に車でその場所に行けば、買い物の楽しみや、便利さが存在する。その影で、“まちなか”は息の根を止められているというのが現実の姿である。

「これ以上の大型店は要らない、石岡市は既存市街地を活かした集約的なまちづくりを目指す」地域の人々がこの理念を共有し、官民一体となって命懸けの決意を固めることができなければ、ふるさとはその存続の余地を失なう。

市民と地元事業者は、鹿島鉄道の廃線という厳しい現実のなかで、行政の“まちなか”再興への情熱と、関連事業への的確な判断及び迅速な対応を期待すると同時に、国等の支援を十二分に活用する方策を講じつつ、ふるさと復興に向けて自ら奮起して、行動を起こすべきである。

現在、どこへ行っても、郊外のロードサイドは同じ風景である。ふるさとに生活する地元の人々の力を集めての“ふるさと復興”でこそ、それぞれの“まち”の特徴を活かした人間らしい暮らしとまちなみの発展が図れると思われる。既に刀折れ矢尽きた感がある地方の中心市街地の住民及び事業者は、起死回生剤として国の援助を渴望しているのが、大方の地方の真実である。

改正中活法で経済産業省としては、「果敢なチャレンジ精神と伝統ある商人魂により、将来のこの国の地域の中核に必要とされる商業機能を再構築していく事業者の取組を、法の成立を契機として、強力に支援し、中心市街地のにぎわいの回復を図っていく方針である。」という改正中活法の期待に応える底力を地域の事業者がふり絞れるか否か、真に正念場である。

一方、行政、この場合、多くは市役所の担当者という事になるが、職員は、必ずしもその道を極めた人材ばかりではない場合が多い。したがって“まちづくり”を誰と語り推進して行けば良いのか、事業者や市民は、まず、はじめの一步から迷っているのである。

そこに我々地域に生きる中小企業診断士としての仕事や役割の可能性を感じる。法改正や郊外大型店進出、地域間競争の中で、まちなか再生の一步をどう踏み出して良いのか迷っている地域の主役である市民、事業所、行政の間に入り、潤滑油として「地域の力」を引き出し、計画的に実行していく実践のお手伝いは、今後の我々の果たすべき使命とも言える。(支部としても研鑽を続けていきたい。)

次に、運営組織についてだが、現在石岡市に於ても、TMO活動は行なわれている。石岡商工会議所は、エキスパートの少ない行政や、関心の少ない市民の間で、孤軍奮闘し、積極的に、(株)まちなか未来いしおかやデマンドタクシーなどの具体的活動を支援・展開しており、その積極的活動は特筆すべきである。新たなまちなか再生を図っていくためには、まずこの様な、組織の力を十分に発揮させられる、「卓越したリーダーシップ」が当然不可欠となる。そして、その基礎となる理念や具体的計画づくり、そして持続的な実行力が肝要となることは、言うに及ばない。運営推進力を高めるためにも地域力を引き出す、編集者としての役割＝中小企業診断士の総合的経営管理力が、発揮出来るはずである。地域のアドバイザーとして、組織に対しても我々の役目がある点も、強調しておきたい。

「株式会社まち未来いしおか」の設立

(1) 会社の概要

- ア. 法人名 株式会社まち未来いしおか
- イ. 本店所在地 茨城県石岡市府中一丁目5番8号
- ウ. 払込資本金 10,000,000円
- エ. 会社設立日 平成17年10月13日
- オ. 設立の目的 中心市街地活性化を目的とした石岡TMO構想事業の実現
- カ. 会社形態 商法及び中心市街地活性化法による第三セクターの株式会社
- キ. 株主 10名 石岡市、石岡商工会議所、(株)常陽銀行、(株)関東つくば銀行、水戸信用金庫、その他5名
- ク. 役員構成 代表取締役大和田達郎以下取締役5名、監査役1名
- ケ. 予定する主な事業 石岡TMO構想事業、夢市場運営、デマンドタクシー受託運営

(2) 設立の経過

- 平成17年5月：TMO推進特別委員会において（仮称）石岡まちづくり株式会社設立発起人予定者、発起人会開催予定時期、発起人会提出議案、当初3期の事業概算目論見について協議・承認
- 5月：創立50周年記念事業特別委員会において、創立50周年事業積立特別会計より300万円を商工会議所一般会計に繰り入れ、（仮称）石岡まちづくり株式会社へ出資することを協議・承認
- 7月：7月8日開催の第18期第7回常議員会で（仮称）石岡まちづくり株式会社の設立及び出資を承認
- 9月：9月16日（金）設立発起人会を開催
 - 場 所 石岡商工会議所役員室
 - 出席者 横田凱夫石岡市長、大和田達郎石岡商工会議所以上2名
 - 議 案 第1号議案 発起人組合規約を定める件（可決）
- 9月28日（水）創立総会を開催
 - 場 所 石岡商工会議所役員室
 - 出席者 横田凱夫石岡市長、大和田達郎石岡商工会議所他株主8名
 - 議 案 第1号議案 創立に関する事項の報告に関する件
 - 第2号議案 定款の承認に関する件
 - 第3号議案 取締役、監査役の選任に関する件
 - 第4号議案 商法第184条所定の事項の調査報告に関する件
 - 第5号議案 取締役、監査役の報酬額決定に関する件
- 10月：10月13日設立登記完了

平成14年度 石岡市中町商店街顔づくり／計画イメージ写真



現 状



計画イメージ

中町が変わる!!
ファサード整備改善
街づくり事業
 参加各店の
 イメージ図が完成、展示中

石岡市中町商店街振興組合のファサード整備改善街づくり事業が着々と進んでいる。

この事業は、同商店街を消費者が求める魅力ある姿に変えようというもので、このほど参加各店のイメージ図が完成し写真、市内の「まちかど情報センター」に展示された。

同振興組合の村山理事長は「県が石岡市を研究対象地区として進めているばらまちづくり実践アカデミーの街並みの保全・修景による中心市街地活性化と、ファサード整備をうまくドッキング出来るとすれば、魅力ある商店街への脱皮も可能ではないかと考えています。地元に残る良いものを集約、活用して、消費者が楽しく買い物が出来ると商店街を『目指したい』と話している。

石岡市の大規模小売店一覧

種別	店 舗 名	設 置 者 名	開店日	業 態	延床面積(㎡)	備 考
第一種	高喜ショッピングプラザ	(株)高喜	S 45.12.17	専門店	5,536	(閉店)
	石岡ショッピングセンター	石岡ショッピングセンター協 (株)ストーンヒル	S 62.12.12	スーパー	17,409	
	ジョイフル	(株)山新			8,554	
	山新石岡店	(ジョイフル山新) (家具の山新)	H 3.11.23 S 50.4.15	DIY 専門店		
	山新イベント館	茨城ファニチャー 協同組合	H 7.2	専門店	5,281	
第二種	(株)七谷	(株)七谷	S 45.3.6	専門店	986	
	(株)今泉家具	(株)今泉家具	S 48.8.1	専門店	2,441	
	(株)小貫タンス店	(有)小貫タンス店	S 50.8.1	専門店	666	
	(株)永貴堂	(株)永貴堂	S 51.7.1	専門店	780	(閉店)
	共和家具	沼知文也	S 52.5.21	専門店	1,713	(閉店)
	カスミストアー石岡若松店	(株)カスミ	S 52.6.30	スーパー	2,308	
	カスミストアー石岡東店	(株)カスミ	S 52.7.12	スーパー	1,753	
	グッドオフ	清水得生	H 11.7.9	リサイクルショップ	1,559	
	ワンダーステーション石岡店	(株)ビバミナミ	H 11.7.2	専門店	3,524	
	高喜府中店	(株)高喜	H 8.10.4	スーパー・専門店	4,157	((株)高喜 閉店)
	スーパーカドヤ石岡並木店	(株)スーパーカドヤ	H 2.4.10	スーパー	1,835	
	ドラック寺島石岡店	寺島薬局(株)	H 4.6.10	スーパー	1,328	
	ケーズデンキ石岡パワフル館	(株)ケーズデンキ	H 4.7.10	専門店	1,602	
	(株)カワチ薬品石岡店	(株)カワチ薬品	H 6.8.21	スーパー	2,978	
	第一家庭電器石岡店	第一家庭電器(株)	H 8.10.26	専門店	1,054	撤退(閉店中)
	マルカワ石岡店	マルカワ商事(株)	H 9.9.25	スーパー	2,961	(閉店)
	サンキ石岡店	(株)三喜	H 10.9.28	専門店		
第三種	ファッションセンター しまむら アベイル石岡店	飯田よし	しまむら H 11.7.1 アベイル H 11.12.18 合体 H 12.2.3	専門店	しまむら 1,126 アベイル 1,109 合計 2,235	しまむら H 11.7.1 アベイル H 11.12.18 それぞれOP後 合体
	(エコスハイマート石岡店) フレック石岡店	(株)エコス (株)フレック	H 11.7.10 H 12.12	スーパー	1,700	(H 12.11.15で閉店) 店舗入替H 12.12
	パワーマート石岡店		H 16.8 H 12.4.13	スーパー	1,700	(H 16.7末で閉店) 店舗入替H 16.8
	スーパーやまうち石岡本店	(株)やまうち		スーパー	1,526	

文化でまちおこしを目指す異色NPOの存在

「地元のまとまりを待っていたのでは、いつになるやら、果たしてその日が来るのか否かも判らない。ハードには巨費が必要だが、ソフト、文化であれば個々の才能と情熱が有れば、市民と一体となった“まちおこし”が出来るのではないか」文化による“まちおこし”を標榜して平成14年に設立されたのは『NPO法人常陸国地域振興フォーラム』（河原稔理事長）である。事務局は、石岡市の国府1丁目1番地とした。現在、メンバーは11人。理事長は石岡市を中心とした地元情報誌の発行が本業、元市議会議員、地元のプロ歌手、事業主などで今のところ構成されている。

石岡市の郊外にある『常陸風土記の丘』を唄った♪風土記花暦、廃線が決まってしまった『鹿島鉄道』の応援歌（鹿島鉄道対策協議会後援）♪夢開く風景、『石岡の祭り』を讃える♪常陸國よ、の三曲の歌を中心に、地元密着の文化



活動を展開している。特に緊急を要した鹿島鉄道に対しては歌の名をつけた『風土記花ごよみ号』を運行したりして、好評を得たが“まさか”の油断の故か、廃線によりカラオケ列車は第七回で、その命が尽きた。

本NPOが目指すものは、ふるさとを愛する人々の心のまとまりである、『市民千人で歌う風土記花暦』を何としても実現する為にどうすれば良いかが目下の目標である。まだまだ真の力を出しきっていないメンバーであるので、底力を出せば千人の動員は、不可能ではない。しかし、集まる場所がない。『風土記の丘』では雨が心配、石岡市民会館では、八百人が限度……それでもやらないよりは良い、ふるさとの歌を歌って、ふるさとの未来を皆で考える機会を作る事が“まちおこし”の第一歩になる事を願えば、越えて行くべき一つ目のハードルであろうと思う。

商店街や行政、他のNPO等、諸団体にも連携を呼び掛けて、まずは“わがまち”をどうするべきかの共通合意を創り上げる事こそが、このNPOの今、なすべき仕事である。

『花』から『夢』そして『國』へ

NPO法人常陸國地域振興フォーラムは、文化による地域おこしを標榜して活動が続けてきたが、第3弾は『常陸國よ』となった。平成18年9月3日に、約500名の参加者を集めて発表会を開催したが、石岡の祭りを讃えた歌は、イントロに石岡ばやしを取り入れた構成、ふるさとの祭りの風景が目浮かぶ詞がお祭り好きの人々の共感を得た。2週間後に行なわれた祭りでは「俺らの町内はみんなで歌おう」という輪が広まった。また「今まで、楽しむだけの祭りだったけれど、この歌のような大切な意義があったんだなあ」と、祭りの本当の意味を語り合った若者のグループもあったと聞く。

“お祭り好き”は、少しその考えを進めれば“ふるさと好き”につながる。石岡に生まれ育ってお祭りのはやしの音に血が騒ぐ石岡の子供、そして、元石岡の子供、これはすなわち大人の事だけれど、お祭りに参加するたくさんの人達が、お祭りをきっかけにして、ふるさとの歴史や未来に思いをめぐらせ心を一つにする事ができたなら、石岡の衰退は防げるに違いない。皆の、お祭りに燃やす情熱がまちづくりにも向いて行くように、ともに歌い、あるいは、ともに、おはやしを奏でながら、市民の輪をつくる事がまちづくりのスタートラインであるかも知れない。

行政、議会に声を届け、手を取り合う為には市民の協調が必要である。石岡の場合、そのキーワードは「お祭り」であろう。それを具現化して、どこでも誰でも聞いて歌える『常陸國よ』は、便利なツールになると思う。“説得するよりみんなで歌おう”という市民活動は、具体的であり、郷土意識を高め、まちなか再生を図る石岡市には大変貴重な活動といえる。

ひたちのくに 常陸國よ

作詞、作曲・山本裕子／編曲・仁田悦朗

一、祭りばやしを 風に乗せ

稔りの季節を 寿ぐ神々

千年の昔より 受け継ぐ恵み

讃えて担ぐ 大みこし

国衞栄えし 古の都

ああ常陸國よ 常世の里よ

二、浮き立つ笛の音 山車が来る

綱曳く稚児らの 行く未来に

たくさんのお幸あれと 祈りを込めて

弁天さまと 仰ぎ見る

筑波の山よ 優しき峰よ

ああ常陸國よ 常世の里よ

三、獅子の頭が 魔を除けて

晴れし行く手に 光差す

めぐり来る祭りの日 指折り数え

待ちて守れる 郷土の

恋瀬の水よ 清らかにあれ

ああ常陸國よ 常世の里よ

ああ常陸國よ 常世の里よ

ま と め

『まちなか活性化プラン』であるから、商業サービス業を中心に考えてきたが、“まち”の再成には、雇用の創出も大切な要因である。もちろん、まちなかの再生で商店に就業する人々の増大を図れるが、工業による雇用の創出は、一企業で多人数が見込めるのでこれも重要である。

過去、石岡市の看板企業であった「精工舎（セイコークロック）」の工場は、最大で850名の従業員を雇い、昼夜交替で働く人々の通勤で石岡駅はにぎわっていた。海外との競争などの要因で精工舎が年々、生産高を落とし、ついには平成16年に工場を閉鎖することになって市および、その周辺の雇用環境は著しく悪化した。市をとりまく景気観も低下したのである。そして、まちづくり三法が改正されてすぐの平成18年11月に、ヨークベニマル、ユニクロ、ケーズデンキ等大型量販店が、広大な駐車場を共用するショッピングゾーン『ウェルサイト石岡』を形成してまたしても郊外へ出店したのである。

結局今は、“自分の街は自分で守る”という、気概と行動力が強く求められているのだ。冒頭でも述べた通り、岩手県宮古市は、市長自らが工業団地への企業誘致のセールスに飛び回っていると言う。宮崎県新人の東国原知事も「宮崎県の営業マン」を自称自認して活動しているのは顕著な例である。

石岡市の北西の旧八郷地区との境に、昭和47年にできた50万坪の柏原工業団地が有り、遊休地の活用が希まれる。常磐道のミニインター『石岡北インター（仮称）』の開設が決まっているというが、積極的な方策をとり、できる限り多くの工場での雇用創出が待たれるところである。労働従業者が石岡市に流入する可能性を捨ててはならない。地元からの雇用促進も景気浮揚には大きな力となる。

やるべき事、実現すれば、良いに決まっている事柄はたくさんある。

しかし、過剰とも思える大資本同志の限らない地方への出店攻勢により、地方の商店街がどこも同じシャッター通りになり、古き良き日本の“まちなか”は絶滅の淵にある。

国の政策の失敗ばかりに責を負わせるのは、簡単であるが、とにかく街が復活しないことには未来はない。まちづくり三法を活用して、魅力あるふるさとの再興に力を尽くすべきである。

まちづくりを、我が事として考える事ができるのは、まちで商売をする事業主であり、そこに暮らす市民である。それゆえに行政の二人三脚でのサポートが大いに期待されるところである。しかし、あらゆる意味で“人まかせ”では生き残れない事実を肝に銘ずるべきである。

まちづくり三法が改正されたが、既に単体のエリアの床面積でさえ、石岡市のまちなかの商店街の何十倍をも有する郊外型の大型ショッピングセンターが出店し終えており、今後の超大型のショッピングセンターの出店も完全否定は難しい。

であるとすれば、まちなかの活性化に何を期待すれば良いのであろうか。

その答えのキーワードの一つは、“ふるさと”ではないか、多少の出入りはあっても、代々、その土地で暮らし、隣近所が力を合わせて運営する町内会や子供会を通して気心を知り、安心して暮らせる“ふるさと”は、心豊かな人生にとって必要不可欠なものであり、共に生きる郷土、ふるさとをより良い生活の場所として守り、子へ孫へと継承して行くことは、人間として尊い活動である。「一円でも安い物を求めて」車に乗ってどこまでも買いに行ったところで、果たして何が残るのであろうか、残ったものは、「空洞化したまちなか」。重要な生活拠点であったその場所は、商業の衰退とともに、極めて暮らしにくい環境となってしまっている。シャッターの降りた街並、人通りのとだえた道には、何が起きても助けの呼びようすらない。顔見知りや、頼り甲斐のある商店のおじさん、優しいおばさんの姿を追うのは夢となってしまったのであろうか。地域こそ一番求められる姿であると考えたい。

そのために真に、ふるさとの街を愛し、自らの事業と共に、ふるさと、地元に貢献することに生きる意味を見出している人々は、今こそ真剣に、力を発揮すべきである。

とにかく、石岡市を訪れる人の数を増やすこと、そしてそのための核づくりとしての施設整備等特化したハード事業推進、そして街の商人には日用品、買回り品の品揃えでは少なくとも、必要最低限のカバーの可能なマーチャンダイジングを考えたい。

街区を完成させること、そして、真骨頂はやはり、文化・芸術で客を呼び、歴史と田舎の魅力を発見してもらえるきっかけを創ることにより、かつて国衙が栄えた、常陸國いしおかの再興へのスタートが切れるものと信じ強く提言する。そして我々地域に生きる診断士は、石岡に限らず、まったなしの状況の愛する郷土に目を向け、各々の立場で「まちなか再生」を考え、行動する必要性がある点も明記し、この章を終了したい。